

第3回宇治市産業戦略策定会議（要旨）

日 時	平成 30 年 11 月 29 日（木） 10:00～12:00
場 所	宇治市産業会館
出席委員	伊多波良雄（会長）、白須正（副会長）、天鷲和之、石垣一也、岡本圭司、川勝健志、河原林一樹、小嶋秀和、多田重光、中川晴雄、中林和夫、西谷剛毅、森下康弘 計 13 名
議事要旨	<p>1．開 会</p> <p>2．会長挨拶</p> <p>3．議 事</p> <p>（1）宇治市産業戦略（案）について【資料1】</p> <p>（委 員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇治市中小企業サポートセンター（以下、サポートセンター）が一番肝になる。どれくらいの規模、どのような業務範囲を想定しているのか。また、（仮）宇治市産業振興会議はどれくらいのスパンで開催されるのか。 <p>（事務局）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇治市の商工労政を所管する課の職員と商工会議所の職員をあわせて 15～20 名の構成による専門機関と考えている。振興会議は 1 年に 1～2 回の開催を想定している。 <p>（委 員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外貨を稼ぐには製造業や観光が重要となる。取組の方向性では商工農業をあげているが観光に関する記載がない。別途、観光振興計画があるとのことだが、観光の重要性は本戦略でも記載したほうが良いだろう。 ・サポートセンターが重要な役割を果たす。一カ所に集約することに大きな意味があると思うが、外部からの資金調達や民間出向者の参加などの広がりを見ると、独自の機関にすることもひとつの手ではないか。 <p>（事務局）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光の重要性はその通りであり、別途計画がある旨の記述を追加したい。我々もサポートセンターは肝になると認識している。ファーストステップとして、一体的な組織を立ち上げて各企業へ赴き、状況を把握したうえでどんな施策をするか考えていく。組織の仕組み

については、走りながら次のステージで考えたい。

(委員)

- ・観光は150年来続いてきたが、ここ10年・15年の変化が大きい。交流人口や消費額など横串の刺さるテーマが多い。産業戦略の中にも観光があり、観光計画の中にも産業としての位置づけが記載されていれば、双方がより密接に結ばれるのではないか。
- ・観光は風評などの影響を受けやすく不安定である。商業・工業のしっかりした産業に加えて観光により層を厚くしていくことが大事。外国人対応については外国人採用が役立つのではないか。

(委員)

- ・サポートセンターが独立機関になることに賛成である。ここで全ての機能を持つのではなく、京都府の各機関へつなぐなど、身軽な体制をつくった方が有効ではないか。
- ・観光は総合産業と捉えている。観光政策として交通や宿泊業、ものづくりへの相乗効果を考えると良い。
- ・課題として、ベンチャー工場の卒業企業が市内に定着しないとあるが、なぜなのか？その理由がサポートセンターの戦術的な話として重要なのではないか。

(事務局)

- ・戦略(案)でも、各機関や京都経済センターとの連携について言及しているが、それぞれの機関とうまく連携していきたい。
- ・観光は総合産業と捉えており、横串の刺さる分野になる。製造業の方が宇治市のブランド価値を作るために必要な産業であるが、観光はそれを支えていく産業であるという位置づけとして考えている。
- ・ベンチャー育成工場の卒業企業は11社あり、市内に3社、市外に4社、残りの4社は廃業となった。市内で用地が見つからず市外に出て入ってしまう現状がある。

(委員)

- ・サポートセンターが市内企業をまわることはとても良い。行政は真面目なので、用事がなくては出向いてはいけないと思っているが、日常的なコミュニケーションがなくてはマッチングができないので、用事がなくとも出かけて行き、他愛もない話をすることも必要。

	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートセンターの中にシェアオフィスがあっても良いのではないかと。3つの方向性を掲げているが、いずれにも「交流」が当てはまる。異業種が集まる場があることは大事。1つのアイデアとして検討して欲しい。 ・情報発信とあるが、英語、多言語対応をして欲しい。現在はネットで多くの情報収集が行われている。コミュニケーションやマッチングについても、市内外・海外の人達とつながることで様々な派生効果が期待できるので、多言語を意識するだけで可能性が広がる。 <p>(委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報発信の「宇治ブランドの向上」に奨励作物の記載があるが、それを使用した加工品や抹茶製品など6次産業的なものも入れてもらえないか。 <p>(委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光地のなかに空き家があるのはイメージダウンにつながるのと、そのマッチングもサポートセンターでできないか。工場は制限があるが、飲食店ならできるだろうし、一部は定住人口、地元雇用につながるのではないかと。 ・京都市では観光公害という言葉があるが、事前のインフラ整備が求められる。例えば荷物を預ける場所など、手ぶら観光できれば多くの人が来るのではないかと。 <p>(事務務)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空き家の適正管理については別途検討を進めている。管理不全になってしまったものもそうだが、管理不全にならないようにするためには有効活用するという施策もある。サポートセンターの創業支援で連携できればと思う。 <p>(委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取組の方向性の中で、起業家を「育成」とあるが、「輩出」という言葉を使う方が良いのではないかと。 ・A3判資料では、企業誘致を「慎重に」とあるが、誘致を慎重にする必要はないのではないかと。誘致の対象としては、付加価値の高い情報系や研究開発、企業一社ではなく企業のなかの一部門を狙うイメージになるのではないかと。
--	--

(委員)

- ・企業誘致をやっていくということを鮮明にした方がよい。宇治市の高い地価を考えると、ニッチ分野で競争力を持つ企業や付加価値の高い企業しか立地できない。
- ・サポートセンターを設置しても、「器」だけでは何も動かない。企業にはりついて、足でまわって、マッチングをする「人」が重要になるので、センターの職員が主役になることを鮮明にした方がよい。

(委員)

- ・行政の範囲と民間の範囲というのは全く違う。京都リサーチパークや金融機関など民間の力を借りることも重要。場合によっては京都府の力を借りてもいい。宇治市内の企業が持つネットワークをカバーする意識が重要である。

(委員)

- ・京大との連携が抜け落ちているのではないか。誘致の側面で考えると京大と結びつく企業を誘致するのが良いのではないか。

(委員)

- ・製造業にとって、率直にいうと宇治市はやりにくい。ものづくりが発展していくときに規制などがあるため、企業が廃業や市外へ転出している現実を認識して、サポートセンターにはきめ細やかな対応をしてほしい。

(委員)

- ・行政は立派な計画を策定して終わってしまうことが多い。冒頭でサポートセンターの内容について質問をしたのは、覚悟を知りたかったからである。話を聞くと覚悟を感じる。短中長期的なこと、自前・他者でできることなど、サポートセンターで整理して進めて欲しい。連携は惜しまない。
- ・宇治市は全国的に有名。世界遺産があり宇治茶がある。ブランドは有効なツールであり前面押し出すとよい。

(委員)

- ・戦略上、優先順位は大事だが、5つの柱はどれも重要であり、いずれ

も成果が出るのは長期的。各施策の中で短中長期の目線を持つと良いだろう。施策は出来るだけ早く着手し、基盤をつくとよいのではないか。

- ・サポートセンターの人材育成も大事。欧米の経済政策を担当している人は大学院で学んだ専門性のある人が多い。職員が専門性を身に付け、マッチングのアイデアを提供できるような担い手になって欲しい。
- ・シェアオフィスについては難しく考えることなく、ここに来れば何か面白いことができると思ってもらえる場所になれば良い。市内に複数あってもいいし、緩やかに発想してほしい。

(会 長)

- ・ユネスコの認定している創造都市を見ると、世界的には民間が担っているケースが多いが、日本では行政が担っている。行政が民間を補完するためには、高い専門性を持つ人材が必要だろう。
- ・5つの柱が有機的に関連付けられるストーリーがあれば、順番ははっきりするのではないか。十分な調査ベースがあるので、そうした視点も一案である。

(委 員)

- ・取組に記載された施策では人材は来ないのではないか。京都市内の中小企業でも人が来ていない中で、宇治市に人が来るか。地元企業が認知されていない現実を知る必要がある。
- ・現在、大企業が中途採用を増やしており、新卒・中途の両方で大企業へ流出している。大学もどれだけ地元企業の採用応援をしているのか、親も大企業を勧めているのが実態。親に知ってもらうことや、就労できる人から就労してもらって奨学金の返済を支援するなど、まずは就労者を取り入れて定住につなげるのが良い。
- ・京都市でアニメ企業による就業イベントを開催したところ 1,000 人が集まった。今の若者がどういうところで就職したいのか。それを反映した企業誘致も有効だろう。南丹市では、ある地元企業が高校に実習用機械を提供したところ、採用に困らなくなったという話もある。

(委 員)

- ・京都産業 21 の登録企業では京都市の次に宇治市が多い。産業振興に

期待している。連携は重要であり、一緒に地元企業をまわらせてもらうなど我々が協力できることはある。

(委員)

- ・雇用について、教育との関係が抜けている。息の長い話であるが、地元の人に地元企業を知ってもらう必要性は京都市でも言われている。
- ・これだけグローバル化するなかで、グローバル化への言及がない。留学生などグローバル化の視点での人材など、販路開拓はもちろんだが、京都産業 21 や JETRO 京都との連携も含めてどこかに盛り込んでどうか。
- ・京都アニメーションという日本を代表するアニメ企業が立地しているので、上手く活用できるならアプローチしてみてもいいのではないか。

(委員)

- ・優先順位についてだが、「市内産業の情報発信」などは、高付加価値化やブランド化などと比べてすぐにできるのではないか。高付加価値化やブランド化を見据えた情報発信ができるだろう。情報そのものの出し方も重要で、生半可な出し方では埋没してしまう。
- ・近年の消費者行動変化に着目すれば、例えば価格・品質はもちろん、生産されたプロセスやコンセプトも重要である。環境配慮や歴史・文化を背景とする製品であるという情報発信が、高付加価値化やブランド化へ繋がるだろう。こうした情報発信は資金調達にもつながる。ESG 投資の観点も大事である。

(委員)

- ・就職のときに宇治市から出て行ってしまふことを止めたい。親や小中学生に地元企業を知ってもらうことも重要。

(委員)

- ・サポートセンターが機能するかが最も重要だろう。
- ・宇治茶は商工業と農家が車の両輪と言われているが、多様化するなかで、宇治市には工夫をしながら生き残ってきた企業が多い。こうしたなか、組合の山林を茶畑にすることや、茶業研究所のオープンラボでの研究が進められている。

	<ul style="list-style-type: none">・ 体験や工場見学により宇治の中での回遊性を高め、お茶に対する知識をもっと深めてもらうようなことができないか。静岡県や鹿児島県でもお茶の消費が減って生産農家は苦しんでおり、抹茶に転作される農家も増えている。抹茶は茶葉をそのまま摂取するので健康に対する効果が様々なところでは言われている。宇治茶が健康に良いということをどんどん広めていきたい。・ 海外で「宇治茶」はかなり認知されてきているが、一方で「宇治茶」というブランドが勝手に使用されてしまっており、ブランドを守るために商標権の確立などへの取組みが必要である。
--	---